



R I. 第2620地区 静岡第2分区
三島西ロータリークラブ

週報

第1778号

事務所 静岡県三島市中央町4番9号 2F
TEL (055) 976-6351 FAX 976-6352
例会場 静岡県三島市本町14-31 みしまプラザホテル
TEL (055) 972-2122
会長 岩崎 守幸 幹事 飯田 守



広重版画より 三島 朝霧

第1840回例会

2010.5.27晴

司 会

前田房江君

ロータリーソング

「それでこそロータリー」
指揮 佐々木雅浩君

会長挨拶

会長 岩崎守幸君

大分以前のお話をさせていただきます。時期は今頃で
大リーグが開幕したばかりです。さわやかな若者2人の
姿をテレビで見ました。一人は大リーグ挑戦中の野茂英
雄投手。もう一人は武豊騎手です。場所はドジャース球
場での対談でありました。その頃、野茂投手はまだ勝ち
星がない一敗中。先行き不安いっぱいのものでした。そ
こへ武騎手が激励に訪れたのです。本人もケンタッキー・
ダービーで敗退したばかりで、いわば失意の身の二人だ
ったのです。でも異国で出会った二人の目は輝いて、む
しろ厚い壁に挑戦できる喜びを確認し合っている、そん
な雰囲気さえ見えました。武騎手が野茂投手に微笑み
ながら語りかけ、その言葉が良かったのです。とても印
象的だったので今日しっかりと脳裏に焼きついています。
それは、あたかも自分に言い聞かせるようであったので
す。「ほくだって米国に来たから負けたんです。来なくて
は負けることもできません。野茂さんだってここに来
て投げたから打たれたんです。投げない人は打たれませ
んよね。」野茂投手は直後の試合から連勝を続ける。夢の
球宴でも先発をし、地区優勝の胴上げ投手にもなって全
米に野茂旋風を巻き起こし、ついにはナショナルリーグ
の新人王も獲得しました。ゴルフも最後のパットが弱か
ったらいつまでも上がらない。確かに何事もまず行動で
叩かなければ扉は開かないのです。

出席報告

	出席総数	出席率	メークアップ	修出席率
前々回	45/52	86.54%	49/52	94.23%
今回	39/50	78.00%	会員総数	55名

欠席者 遠藤(正)君、小野君、勝間田君、鈴木(郁)君、
鈴木(貞)君、諏訪部(敏)君、千葉君、原君、
矢岸君、米山君、渡辺君

ポール・ハリス・フェロー表彰



古川喜仁君 佐々木雅浩君

幹事報告

幹事 飯田 守君

①次週、須田哲司さんの入会式を行います。

2009～2010年度
国際ロータリー会長
ジョン・ケニー

ロータリーの未来はあなたの手の中に



スマイルボックス

- ◆森崎君、室伏さん、先日は大変お世話になりました。佐々木さん、先日は大変ありがとうございました
- ◆鈴木(雅)君、清水銀行三島支店、5月24日無事移転オープンし、開店イベントも盛況のうちに終了いたしました。ご来店いただいた皆さん、どうも有難うございました。
- ◆窪田君、5月26日東京中央市場、丸文ケヤキ祭で大型2台分くらいのケヤキを買うことができました。来週入荷します。楽しみです。
- ◆室伏君、森崎さん、先日はお嬢様「春菜様」の結婚式おめでとうございます。お手伝いさせていただき感謝いたします。又、春菜様にはFMみしまかんなの新しい番組「ありがとうは突然に」をプロデュースしていただきありがとうございます。放送審議会にて「良い番組です」というお墨付きをいただきました。

卓 話

戒名について

望月哲也君

日本の仏教界には、亡くなった人に戒名をつけるという独特の慣習がある。また、その戒名にはランクがあり、院号や居士号といったいい戒名をつけてもらうためには、相当の戒名料を請求されることも多い。そもそも死者に戒名をつけるということは、仏教の教えや信仰に根拠をもっているのだろうか。

仏教界の側からは、それはその人が仏弟子となった証であり、したがってまた、それは死後においてではなく、生前中に受戒式を受けたうえで授かるのが本来のあり方だといった説明がよくなされる。しかし、これはいかにもとってつけたような説明である。

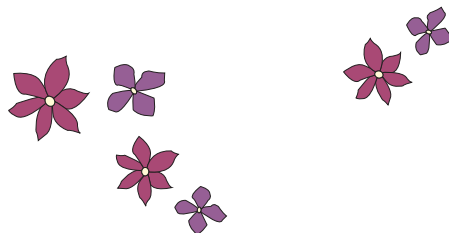
仏教がインドに誕生した時代には、戒名それ自体が存在しなかった。修行者たちは出家する際、俗世間での名前を捨てて改名するということはなかった。出家者が俗名を捨てて戒名を用いるようになったのは、仏教が中国に伝来してからである。しかしそれは、出家、得度した人間にのみ与えられる名前だった。中国人の葬儀は基本的に儒教葬であり、仏教が葬儀に関与して死者に戒名をつけるというようなことはなかった。

ところが日本では仏教が葬式仏教化し、最初に禅宗で在家信者の葬法が確立され、その際、いったん出家のかたちをとらせるために死者に戒名が授けられることになった。それが今日にまで受け継がれているのである。

さらに、葬儀の際に、僧侶へのお布施とは別に戒名料が求められるようになったのは、寺院経済のあり方の変質とも関わっている。昔は、寺院というものは貴族や武士が寄進して建てるものだった。しかも、その寺を維持するための費用を賄うために、田畑が寄進され、そこを小作させて得たお金が寺の収入となるシステムができあがっていた。ところが、明治政府による寺領の没収、そして戦後の農地解放によって、その基盤は次々と崩されていった。各寺院は土地という安定した経済的基盤を失い、もっぱら葬祭儀礼の収入に依存しなければならなくなった。戦後、戒名料による収入が寺院経営の不可欠の一部になり、その額が相当な割合で上昇してきたのも、寺院が葬送儀礼からの収入によりいっそう依存しなければならなくなってきたからである。

加えて、院号などの立派な戒名をもらえば、粗末な葬儀はできないし、僧侶を何人も頼まなければならない。また本堂を改築するといったときには、そのための寄付額もまた、戒名の格に応じて決定されることが多い。要するに、現在の寺院にとって戒名は、授戒という趣旨とは裏腹に、完全に「商売道具」になってしまっている。

戒名をめぐるこのような実態をそのままにしておくことは、やがて仏教界の信用を失墜させることにつながりかねない。痛し痒しである。



(週報担当：瀬川幸信)